

青山吉信・木村尚三郎・平城照介編

『西欧前近代の意識と行動』

山代宏道

十年前わが国で歴史学の対象として人々の意識や行動様式を

追求することはいまだ稀であった。本書は、一九七六年「世界諸文明の一類型としての西ヨーロッパ諸民族の生活・社会・文化の根幹を形成してきた人々の意識や思考また行動様式の特異性を、心性・宗教・社会制度等の各局面について、それらの基底の形成された中世に溯って比較史的に検討する」(はしがき)目的で組織された西洋生活意識研究会一三名の研究成果である。

本書は三部から成る。まず各論文内容を紹介する。序論の木村尚三郎「ヨーロッパの基層文化―中世人の生活意識をめぐって―」は、一九七〇年代半ば以降の低成長経済下で、過去を歩発展の一つづきの過程のなかに位置づけるのではなく、過去人の知恵と体験、多彩な生を掘り起し、これを学び生かすことの重要性を説く。進歩と発展を信じた高度成長期には、ヨーロッパの農村・都市・キリスト教・大学の出発点を大躍進期である十二・十三世紀に求めた。しかし現在、視点は中世末の十四・十五世紀に向かう。今日的なヨーロッパ人の心情、生活意識、キリスト教的的心情の内実、家族中心の日常生活、衣食住留意の生活文化、死を意識した生き方、近代的時間観念は、いずれもこの時に形造られたと主張する。さて、こうした見方に対して第一部執筆者はどう答えるか。躍進期の時代精神は今日まで継承されているのか。もっとも高成長期があったればこそ、それに続く低成長期の特徴がより鮮明に感知されたのかもしれない。

第一部四論文は、中世キリスト教を中心に奇蹟・伝説・教区

・十字軍を論じる。青山吉信「偽作と伝説―グラストンベリー伝説形成の側面―」は、『グラストンベリー修道院古史』と原著者マームズベリのウィリアム(WM)の他作品との厳密な比較分析に基づき、「聖ダンスタンの聖遺物の移送・再発見説話」が原作に含まれなかったことを明示。執筆以前の同説話の成立にもかかわらず、WMは沈黙を守り、修道士たち捏造の「説話」を「歴史」化しなかった。作られた伝説を矛盾なく受け入れた中世人の心的特性を窺い、危機に直面し權威高揚と巡礼誘因のため聖遺物獲得や伝説作り狂奔した修道士団の「註文」に応じた「職業的」著作家の存在を思うとき、WMの歴史家としての批判的精神が一層光る。

朝倉文市「小教区の成立―サクソン末期の小教区教会について―」は、十一・十二世紀小教区制の形成過程を諸国王法典・The Domesday Monachorumの詳細な検討を通して描く。オールドミンスターから小教区教会への「ゆるやかで殆んど痕跡を残していない」移行ゆえの研究上の困難にもかかわらず、創設者や十分の一税との関連で小教区教会を位置づけ、私有教會的性格や主任司祭の生活を解明。では、教会に対する教区民の意識はどうか。教会税や謝礼を要求した教会は、同時に貧者には気前よく施物を与えたとされるのであるが。

八塚春児「第一回十字軍と教皇―教会統一問題を中心に―」は、ウルバン二世の意図をめぐり年代記や教皇書簡を分析、第一回十字軍と東西両教会統一問題との関連を論じる。グレゴリウス七世以後の教皇の東方政策、さらにビザンツ皇帝・神聖ロ

ーマ皇帝・対立教皇との関係のうちにウルバヌスの立場を説得的に位置づけた。実現しなかったとはいえ、ウルバヌス自ら渡航する意向があったとの指摘は、評者に今日の教皇の積極外交を思い起こさせる。

渡邊昌美「奇蹟と幻想」は、年代記・奇蹟録・事蹟録・聖者伝等の中世史料中の「聖者の夢」「王者の夢」といった幻想の記録を検討、また奇蹟との異同を論ずる。虚像に取り囲まれている点では現代も変りないが、それへの対応が違ふとしながら、中世人にとっての意味を探る。さらに奇蹟譚類型の検討から民衆信仰の理解を図る。奇蹟の日常的な頻発を確認、奇蹟の自然発生はなく発現者と被験者の積極的働きかけが不可欠、との指摘が注目される。豊富な事例はいずれも興味深い。

第二部四論文は、宮廷・都市を中心に生活環境の形成や生活・文化の諸相を描く。里見元一郎「宮廷文明の系譜―S・イエイガーの近著の紹介をかねて―」は、フランス宮廷でのクルトワジー成立の底流におけるオットー・ザリエル朝ドイツ宮廷文明の存在を指摘、その内容を明示。宮廷作法手引書、宮廷人司教の役割、そして教会改革運動と共に始まる反宮廷論を論じる。宮廷人司教の学識・徳行・作法と共に、容姿の美しさ重視は興味深い。王の目にとまったばかりか、民衆もそれを望んだのであろうか。

瀬原義生「中世末期ドイツ市民の歴史意識―都市年代記を通してみた―」は、十四世紀後半成立のドイツ都市年代記分析に基づき、市民の国家・政治観、社会意識、歴史意識を探る。ア

ウグスブルク年代記にみた都市自治を脅かす諸侯不信を示す政治意識、ニュルンベルク年代記の都市、「帝國」の主体とする国家観、また過去・現在・未来を持統する現在の立場で書く年代記者の時間観念を解明。年代記者ツィンクの執筆基礎となつた旅行体験と見聞、彼の生活の紹介は非常に具体的。

鯖田豊之「都市環境の特色—ヨーロッパ型上下水道の背景—」は、ロンドン・パリ・ウィーン・ハルブルクを中心に中世から現代に至る都市民の飲用水獲得の歴史を描く。都市独自の事情と絡めて、水車・蒸気機関による揚水技術、導水事業、コレラ流行と病原細菌学、緩水砂濾過技術など各時代の対応を論じる。今日ヨーロッパの地表水を敬遠し泉水・地下水に執着する態度はなぜ生じたのか。浄水技術不在で蒸気機関だけが独走した時代の集中給水の恐怖は深刻すぎた、との指摘が印象深い。

志垣嘉夫「女と男の情景—裁判史料抄の瞥見から—」は、十八世紀ブルゴーニュ北部の裁判史料中の妊娠申告書を分析、当時の民衆世界、特に人間関係の根幹たる男女関係をいきいきと描写。「子は私生児の、母は未婚の母の烙印を押されて、共同体から排除され、流浪の生活」を強いられた時代に、妊娠申告は男の横暴から女を保護する手法統として機能した。申告もできず新生児を殺す女の悲劇、聖職者との男女関係、裁判管轄問題を論ずるが、個々のケースの詳細な紹介は名もない女たちの生きた証しを再現するのに十分。

第四部四論文は、家・城・軍隊と国制・社会生活との関連を追求する。平城照介「戦士から軍隊へ—フランク時代の軍制に

関する覚え書き—」は、H・ダンネンパウアーとTh・マイアーの見解を中心に、カロリング軍制との関連で「國王自由人」学説を再検討する。まず同学説の理論的枠組みを明快に整理、マイアーの「完全自由人」は軍役義務を負わない存在でありえたのか、と問う。次に「古典学説」の根拠となったカロリング勅令を比較的新しく成立した全自由人の軍役義務原則の具体的表現と想定、対外戦争への従軍権をもつゲルマン戦士から軍隊王権下での全自由人の軍役義務化の過程を解明。ダンネンパウアーの「豪族支配体制」の連続性概念に劣らず、氏の軍制移行説も極めてダイナミック。

木津隆司「西欧中世の人家√人家族√の研究の現状と問題点—」は、西欧中世の家族がその家産を中心に弛緩—緊密状態—夫婦中心の家族へと凝集していく傾向を、進化の時代差・地域差を踏まえて考察、最近西欧での研究状況の中に氏の研究を総合的に位置づけた。カロリング貴族の親族組織と統治機構の適応的關係、血縁關係の弛緩から緊密状態への移行期（脅かされた貴族一門の防衛意識の高揚期）と系譜伝や年代記等歴史文学の開花期との対応が目される。

井上泰男「中世フランスの城と集落—」は、十一—十三世紀社会を特色づける城主支配の基礎にある村や都市など集落の形成過程を、ベリイとオーヴェルニュ両地方を中心に個別具体的に跡づけた。集住の二極としての教会と城の役割、自生的植民集落の形成、城外郭地の重要性など地方の特徴を、王権進出といった大きな時代背景の中で構造的に叙述。多数の地図・都市ブ

ランが有益。また「武装された教会」の存在が印象深い。

阪口修平「プロイセン絶対王政期の軍隊と社会」は、絶対王政形成に重要な意義を有した常備軍をとりあげ、軍隊と農民、軍隊と貴族、軍隊と都市民の関係を、軍隊側と農民・貴族・都市民側の双方から考察、その全体的構図を描く。カントン制度・将校団・駐屯都市の分析にみられるごとく軍隊にとって農民・貴族・都市民は必要不可欠の構成要素をなし、他方、軍隊は登録制度貴族の将校化・都市経済への影響等を通じて、彼らの社会生活を直接に規制していったことを解明。「社会の軍事化の諸相」をバランスよく簡潔に説明している。

以上が各論文の紹介であるが、本書を通読して抱くのは、「あとがき」にいう「研究の対象領域自体の拡大」と「研究視角の内容的深化」とを通じて「歴史の全体的把握への途を切り開く」ことに成功している、という印象である。しかも紹介された個別事例はいずれも興味深く読めるが、同時にアカデミックなレベルをはずれることはない。

(刀水書房、一九八六年二月、四二六頁 五八〇〇円)